浅間神社

鎮座地：千葉県館山市香字稲荷森九八三

祭神 木花咲耶姫命（このはなのさくやびめ）

宮司 酒井昌義

例祭日 毎年七月十五日

香　浅間神社

由緒

神社入り口には、寛政十三年（一八〇一）に地元の弥惣兵衛が奉納したと刻される手水石が残っています。

浅間神社下から海岸へ向かう参道には、浜鳥居が置かれ、そこには文政十年（一八二七）に奉納された石灯籠が立っています。

また、裏山山頂にある奥の院の手水石には、天保十一年（一八四〇）の文字が刻まれています。

拝殿の中には元禄時代に修復したとされる木札が残っており、江戸時代中期からの深い歴史がうかがわれます。

毎年、五月三十一日の早朝に、氏子たちが男道、女道とに分かれて浅間神社を参拝し、御三幅の掛け軸を拝みの御本尊として「お富士講」が今でも連綿と行われています。

海岸へ向かう参道にある浜鳥居

自慢の祭

「浅間神社」と書かれた大幟が浜鳥居参道の両脇に立てられると、香の祭礼が始まります。

昔の香の祭礼は、七月十四日に祭典と宵祭を行い、十五日が本祭、十六日には納めが行われ、三日間にわたり祭礼が行われており、十七日に御霊返しを行っていました。

当時は大殿と中殿を擁し、きらびやかな装束に兜をかぶった天狗やおかめを先導役にたてて行列をなし、西岬地区見物の海南鉈切神社まで渡御し、香、潮見、浜田、見物の4地区とで合同祭礼が執り行われたこともありました。

その当時に立てた大幟はじめ、神輿行列に加わったと思われるおかめの面や衣装なども、現在、神社境内にある旧集会所でにて大切に保管されています。

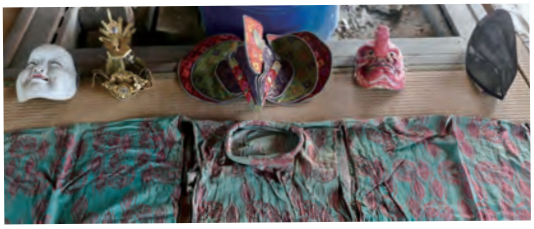
香の現在の祭礼は、青年団員からなる「香会（かおりかい）」が中心となって準備から神輿渡御までを執り行っています。少子高齢化などの影響により、神輿の担ぎ手も子ども少なくなりましたが、手伝いの人たちを入れておよそ50～60人の人たちによって、午後一時から夕方までの時間に神輿渡御が行われます。

昔ながらの神輿唄をとぎれることなく唄いながら、はじめに浜鳥居を抜けて、その後は町内各家を隈なく回ります。その神輿渡御の姿は、昔と変わらぬ伝統を継承した、香の風景に溶け込んだ自慢の祭です。

香海岸の渡御

くまなく地区内を巡行する大神輿

大神輿と小神輿



大切に保管されている昔の衣装など

浜鳥居の前の参道を抜けて海辺へ

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。
内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。